

Title	「パガン時代」
Author(s)	服部, 正一
Citation	大阪外国語大学学報. 16 p.47-p.73
Issue Date	1966-03-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80256
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「パ ガ ン 時 代」

服 部 正 一

နိဒါန်း

န မေတ္တဿကဝတေတသရဟတေသမ္မာသမ္ဗုဒ္ဓဿ

လွန်ခဲ့သောနှစ်အနည်းငယ်လောက်ကွင်းကွဲခဲ့သည်။ "ရှေးခေတ်မြန်မာ" အမည်နှင့်သောင်းပါးတစ်စောင်ကို "ဂါကုဟို" ဘုရားရှေးသား ချီးမြှင့်ပါသည်။

ကွန်တေသည်စာတော်နှင့်အညီပါအကြောင်းအရာမှတစ်ဆင့် "ပုဂံခေတ်" ကိုသောခေါင်းစဉ်ဖြင့်အနော်ရထာမင်းစောသမ္မာပြည်ကိုတိုက်ခိုက်အောင်မြင်သည်မှစ၍ အလောင်းစည်သူမင်းနတ်ရွာစံတော်မူသောအချိန်ကတစ်ဆင့်အောင်ကိုကန့်သတ်ကာပုဂံသို့ကျေးမှုအကြောင်းအရာနှင့်ပတ်သက်၍အကျဉ်းချုပ်ရှင်းလင်းဖော်ပြအပ်ပါသည်။

မြန်မာယဉ်ကျေးမှုသည်ကား ဗုဒ္ဓဘာသာအယူဝါဒကိုသာအခြေခံ၍သာတဖြည်းဖြည်းတိုးတက်ထွန်းကားခဲ့လေသည်။ ဗုဒ္ဓဘာသာသာသာနာတော်သည်အခြားသောသာသာနာတော်နှင့်သွင်းငွင်း၊ အများပြည်သူတို့နက်နဲစွာယုံကြည်သောနတ်တို့ကွယ်ခြင်းနှင့်သွင်းငွင်းမည်သို့ဆိုငြိမ့်တိုက်လွန်ခဲ့သည်ကိုသောခေါင်းပါးနှိုက်သရုပ်သကန်ဖော်ပြပေးသည်။ ၎င်းပြင်ပုဂံမင်းဆက်များအကျဉ်းချုပ်ဆက်သွားသောတုရားကျောင်းစေတီတော်များအကြောင်းများကိုလည်းဖော်ပြပါအပ်ပါသည်။

စာပေလောကနှင့်သက်ဆိုင်၍ ပြောရမည်ဆိုလျှင် ပုဂံခေတ်သည် (ကျောက်စာခေတ်) ဖြစ်သဖြင့်အများအားဖြင့်စကားပြေရေးနည်းကိုလေသည်။ သို့သော်၎င်းအကြောင်းကိုကားနောက်နောင်သောအခါအခွင့်မှအကျယ်ဖော်ပြရန်ရည်ရွယ်ထားပါသည်။ ဤသောင်းပါးဦးမူဘာသာသာသာနာ၊ အတိတ်ပညာ၊ ဘာသာစကားအက္ခရာစာပေ၊ နိုင်ငံမှု၊ တိုင်းနိုင်ငံစည်ပင်သာယာခြင်းအကြောင်းများနှင့်စပ်လျဉ်း၍ ပုဂံခေတ်ကာလအခြေအနေအထားကိုကောက်ဖော်ပြတင်ဆက်ရန်သာဖြစ်ပါသည်။

ま え が き

第12号の「古代ビルマ概観」の続編として「パガン時代」と題し、アノーヤター王のタトン攻略（1057年）よりアラウンスィートウ王の最後に到る間のパガン文化について概説を試みた。

ビルマ文化は仏教を基礎として発達した。仏教と他宗教及び民衆の間に深く根ざした土着信仰との葛藤を描き、パガンの歴代王朝が競って建立した寺院やパゴダ等について述べた。文学の面においてはパガン時代はいまだ碑文の時代であって主として散文形式をとっていたが、このことについては「パガン時代」以降において詳細に述べたい。本論文においては宗教・教育・言語・文学・政治・経済等に関し、パガン王朝を中心として当時の状態を概略的に考察した。

ビルマにおいて事実上、仏教が国教として確立されるようになったのは西暦1057年、アノーヤター（Anawyahta）王のタトン攻略によってであり、この1057年は実にビルマ文化史上最重要な年とされている。（学報第12号P. 110 参照）

この論文もこの年より出発して書き初めることにする。なお本論文では煩瑣を避けるため、仏暦及びビルマ暦を省略して、西暦のみを用いることにした。タトン攻略の成果として特に注意すべき3点は、

- (1) タトンよりパガンへ連れ去られた多数の捕虜の中には学者、僧侶、*技術者等が含まれていて、これらの人々はパガン文化に大いに寄与した。
- (2) アノーヤター王に小乗仏教を説き、王のよき忠告者となったモン族の僧侶であるシン・アラハン（Shin Arahān）はタトンより来た僧侶のうちより多くの助力者を得、彼が必要としていた30巻の三蔵経を入手することができた。
- (3) パーリー語が仏教聖典の注釈語として用いられ、北部ではその時まで盛んであった大乘仏教に小乗仏教がとって代った。

こと等である。

* 捕虜の技術者の中には建築技師、火薬兵器技師、彫刻師、ろくろ師、画家、石工、セメント工、金銀細工師、真ちゅう細工師、鍛冶工、音楽師、獣医（但し、象と馬に限る）、象乗り、騎手、盾作り、料理人、髪結い師、香料作り、等が多数含まれていた。（Hman nan: Mahā Yāzawin, Vol. I, P. 273）（これらの職種の中で、彫刻師、ろくろ師、画家、石工、セメント工、金銀細工師、真ちゅう細工師、刀鍛冶、音楽師、象乗り、等がマンガレーの郊外の部落やカレワの部落などにグループをなしてそれらの職業を先祖

代々より受継いで暮しを立てている人々を私はかつて訪れたことがあるが、彼らの技術は実に優れたものであった。)

かくして、インドの北部及び南部両面の文化がパガンに集中したのである。

アノーヤター王はそれらの三藏経を永く保存するために仏典保存所を建て、そこに大切に保存し、僧侶たちにそれらを学ばせた。その仏典保存所は1783年に Bō:-daw-hpayā: が修理し、今日もなお存在している。またアノーヤター王は仏典をモン語よりビルマ語に訳させた。この時初めてビルマ文字がモン(語)文字より移入されたのである。従って、ビルマ文字はモン(語)文字の前身であるところのインド系のパラワ文字に属するもので、デワナガリー文字とテルグ文字の混合せるものより発達し、時代を経るに従って今日使用されているように円みを帯びてきたのである。

しかし、ビルマ文字が出来上ったことに関して時代にくい違いが生じている。“A Guide to the History of Burma”にはビルマ文字が造られたのは A.D. 950年頃だと書かれているが、これは間違いではないかと思う。というのは950年といえば、アノーヤター王が即位する94年も前のことであり、また、その時代に古代ビルマ語で書かれた碑文は何一つ残っていないこと等から考えて、950年頃とは到底信ずることはできない。実際に存在している碑文で、古代ビルマ語にて書かれた最古のものは Let-thī:-she-hpayā: の碑文であるが、それは1058年、即ち、タトン攻略の翌年の記録であるが、ウ・オン・マウンのビルマ史ではビルマ文字がモン文字より移されたのはタトン攻略後直ちに行われたとは思われたいと言っている。私が調べた限りでは、その他のビルマ語で書かれた碑文は古いものでもタトン攻略の年より80年以上後世のものが大部分である。いづれにせよ、ビルマ語が文字にて表記されるようになったのはタトン攻略後である。

プロームでは西暦1世紀頃より勢力のあったピュー族(Pyu)がアノーヤター王に敬意を払うようになった。ピュー族がアノーヤター王に従うようになった理由は王がタトン攻略を終えての帰路、プロームに立寄り、かの伝説的なピュー族の英雄ドッタバウン(Dottabaung)王の時代以来、仏の前額骨と仏牙を納めてあったパゴダを破壊して、聖骨をパガンへ運び去り、仏教に関してはパガンのみを師表とすべきことをピュー族に示したことによるのである。

北 部 ア ラ カ ン 征 服

国境が時折、アラカン軍によって侵されたことを理由に、アノーヤター王は次の征矢を北アラカンに向けた。しかし、王の心の中にはアラカン国にあったマハムニ(Mahāmuni)像を手に入れたいたいという考えがあったに違いない。アン峠を通過してアラカン山脈を越え、アキャブ地方のピ

ンサに首都をもっていた北アラカン王を屈服せしめた。Hman-nan : Yāzawinによれば、その時アラカン、王はアノーヤター王へ16才になるティー・フライン・ピューという王妃と共に金銀財宝を贈ったが、彼女についてはその後何の記録もない。ビルマ軍はかねがね目をつけていたマハムニ像祠堂に安置してあった金銀の聖器を取去ったが、その像は余り重いためアラカン山脈を越えて持ち去ることはできなかった。そこで他日アラカン人がビルマ側へ侵入することができないようにその堂内のナッ像を埋め、その霊木を引きぬいて魔力の根源を断ってしまったそうである。

現在マンダレーに見られる Mahā-Myat-Muni Hpayā: はアラカンのマハムニ像ではなく、その似像であると云われている。“Thutethana-thayot-pya Abhidān” には当時のビルマ国内における戦争の原因として13の理由があげられている。即ち, “Loka-byūhā-kyan:” より,

- (1) 国境線侵害のため。
- (2) 世俗的財宝に対する欲望のため。
- (3) 良象, 良馬を求めるため。
- (4) 兵器獲得のため。
- (5) 姫に対する欲望のため。
- (6) 中傷術策のため。
- (7) 裏切り行為のため。
- (8) 使臣侮辱のため。
- (9) 民族及び宗教を侵害したため。
- (10) 王の政治に対する不信のため。
- (11) 兵士不足のため, 他国より人力を得るため。
- (12) 商人の欲望のため。
- (13) 怨恨のため。

しかし、これら13の理由も、縮約すれば「欲望」と「怒り」という2つがその原因となることが解る。例えば、アノーヤター王のタトン攻略も仏典及び人材、財宝等に対する欲望とタトン国王マヌハによってパガンの使者が侮辱されたことに対する憤りとこの2つの原因が指摘される。しかし、なお掘さげて考えれば、当時インドの勢力が南ビルマに浸透し、やがては首都パガンにまで及びはしないかという不安がアノーヤター王の脳裡にあったかも知れない。もしそうであれば、北ビルマを安全にしておくためにはどうしてもタトン一帯をアノーヤター王の勢力下に置き、インドの勢力を阻止せねばならないという政治的な考慮も推察できないこともない。

また、アラカン征服の場合も、国境侵害に対する憤りが直接の理由であろうが、元来パガン歴

代の王はマハムニ像及びその他の財宝に欲望をいだいていたためであることは明白である。

セイロンとの関係

当時、セイロンはマドラスのチョーラ国の来寇を受け、仏教はヒンズー教徒によってはげしく迫害され、僧侶の数は著しく減少していた。セイロン国王ヴィヂャヤ・バーホッー世は1071年自力にてヒンズー教徒を追い払って、仏教の荒廃を救うために経典及び僧侶の補充を願うべくアノーヤター王に助力を求めてきた。王は直ちに国王の要求に応ずると同時に親交のため白象をも献上した。その返礼として仏牙を贈ったが、それは真の仏牙ではなく、仏牙を再製する神秘力をもっと信じられていた分体であった。それは宝石をちりばめた、りっぱな小箱に入れられ、大式典を以てパガンに送られてきた。この仏牙は後にプロームより発掘された仏の前額骨と共にシュエジゴン・パゴダに安置された。シュエジゴン・パゴダについては第12号、P.111, 112参照。

時に、ビルマの北部及び東南部一帯に居住するシャン族は山岳高原地帯を本拠としていた。その土地は農作物を産するに適さず、生活に困っていたため、より豊かな土地を求めて低地であるビルマ側に入ってくることは当然考えられることであった。そこでアノーヤター王は彼らの流布を防ぐためにビルマとシャン州の境界線を固めることが必要であると考えた。そこで王は北部、東部、東南部の国境に警備町村を設け、43の前哨地点をおいた。

ウッター・ペグーへ援軍派遣

シャン諸種族はアノーヤター王の防備強固なビルマ側へ流入することが困難であることを知ったので、タトン攻略後勢力のやや衰えたモン族がタトンよりペグーへ移ったことに目をつけた、と察せられる。ラオ・シャン族、即ちジョン・シャン族がズインメ (Zinme) (またはシャン族はケンマイ Kengmai と呼ぶ) よりペグーを襲った。ペグー王はアノーヤター王に援軍を要請した。Hmanman: Yāzawin によれば、アノーヤター王は40万の騎馬兵を援軍として送ることを約束したが、実際にやって来たのはチャンジッターを含む4人の勇士と80人のインド兵であった。ペグー王は内心不安を感じたが、彼らは実によく戦った。人間業ではなくナツであると云ってペグー王をはじめ人々は驚いた。この事件はラオ・シャン征服として、その後のいきさつについては12号、111頁に述べたのでここでは省略する。

ついで乍ら、“ジョン・シャン族の反乱”をビルマ語では Jon: thā-bon-dha と云うが、この表現は現代語では「主人または長が不在の際に起る出来事」を意味する。それはこの事件から由来している。(That-Pon-Abhidān, P. 198)

アノータター王の巡狩

アノータター王はしばしば巡狩 (Taing: hkan: hlè lè gyin:) を行った。「巡狩」とは王が兵士をひきいて諸国を巡視しながら機をうかがって宝物その他王の欲するものを強請することである。しかしアノータター王の場合、それほど専横的な振舞によって人民を苦しめたとは思えない。“Taing: hkan: hlè lè gyin:” は現代ビルマ語では「(高級官吏の) 出張旅行」を意味する。(Burmese Glossary by William S. Cornyn and John K. Musgrave)

かつて王は諸国を巡狩し廻っていた際に、ベンガルに到着した時、Hman-nan: Mahā Yāza-win, Vol. I, p. 259 によれば、その時、王は「将来、徳の高いビルマの王子や王孫がこの国を訪れることがあれば、美しい音楽を奏せしめよ。」と云って、太鼓、堅琴、トルンペット、ラッパ、笛、その他各種のビルマ楽器をもった舞踊姿の石造の人像を建てさせた」と記されている。

また、王はシャン州の国々を訪れ、東部シャン高原に達した時、そこに水堰を見た。彼は行く所々にて尊敬を受け、ヤンフウエの近くにボーリタッ (Bawrithat) パゴダを建立した。

王はこのように戦いをするためでなく、自然の美を楽しんだり、知識や見聞を広めるために巡狩の旅をしたのであった。帰国後、ビルマ国の進歩発展のために灌漑用水の便を計り、これに基づいて、農耕、菜園作り、商業の繁栄に力を尽した。殊にチャウセ (Kyaukse) 地域には灌漑水路をパンラウン河に4つ、とゾーザ河に3つ設けた。その時以来現在に到るまで、チャウセ地方はビルマ北部の米倉地帯として有名になった。また王は適当な所々に大小の町や村を新たに建設し、課税徴集額に応じて町や村の等級を定めたり、メティラ湖の修復、パゴダの建立等々にも力を尽した。このように行政上、経済上、宗教上のアノータター王の業績は実に偉大なものであった。

アノータター王の最後

アノータター王は巡狩の旅より帰国して間もなく、1077年野牛に突き殺されて相果てた。この非業な王の最後について Hmannan: Yāza-win には次のように語られている。

ある時、王は灌漑用水池を造営していた際に畠の中の仮小屋にて一夜を過ごしたことがあった。その時、その小屋の下の地面より蛙の鳴声が聞こえた。王は早速二人の占星学者(*Hū: yā:-hpyū, Hū: yā:-nyo) に調べさせたところ「雄蛙が死んだので雌蛙がその死体を背負って泣いている。」とのことである。その事について更に調べさせたところ、それは不吉な前兆であって、その兆によると、王がパガンの宮廷に到着するまでに敵の手にかかって没するであろう、というのであった。王は立腹して地面を掘らせると、占いの通り、雄蛙の死体が発見された。王は占いの

後半の部分が間違っていたら、占ったその二人の占者を処刑するであろうと云って、彼らの足に鉄鎖をはめさせて、牢獄に監禁した。王はパガンへ帰り、サラパー (*Sarapā) の城門より入ろうとした時、1人の狩人が馳せ来たって、今パコック地方のアウンダー河の岸辺に1頭の野牛が荒れ狂って住民に危害を加えていることを王に話した。それを聞いて、王は野牛をとり鎮めるために白象タンミンゾワ (Than-myin-Zwā) にまたがってその場へ向った。王が野牛を見つけると、野牛は象の上を飛び越え王めがけて跳びかかり、王は重傷を負って、難を逃がれようとしたが、ジャングルの中で息が途絶えた。将兵たちは王を探したが、王の姿は見つからなかった。

野牛は本当の水牛ではなくて、Nat の化身であったと云われている。それはセックパーラ (Sekkhupāla) 水牛であって、以前にアノーヤター王が中国遠征 (12号, 111頁) の途上、レインビン樹 (Lein-bin = Terminalia bialata) を守る Nat-saung が樹上から降りて来て王に対して敬意を示さなかったという理由で、王がチャンジッターにむちで打たせた。ナツは恐れて樹から下りて逃げ去ったが、ナツはこの仕草を怨んで、アノーヤター王の衰運を待ち、野牛と化して復讐したのであると、ビルマ人は信じている。

その後、王の死体はレインビン樹を守るナツとナガーとが争って奪い合ったが、タチャーミン (インドラ神) が死体をさらってカンダマーダナ山にて火葬にしたという。タンチー山の東南端はナツとナガーが争った場所としてそこをルータウン (奪い合いの山) と今日でもその住民は呼んでいる。

この事件は Nat 信仰に関する一例であるが、王といえども Nat の支配から免れることができないということは一般ビルマ人の信ずるところであり、非科学的に思われる怪奇な Nat の存在はビルマ史上到る所にうかがわれる。

Nat 信仰に関しては学報第14号, 11頁～38頁参照。

* Hū: yā:-hpyū とはタレケッタラのバラモン占星術師を指し、Hū: yā:-nyo はアラカンのバラモン占星術師をいう。また、もう一つの説は Hū: yā:-hpyū はバラモンの占星学者をいい、Hū: yā:-nyo はビルマ人の占星学者をいう。

(That-pon-Abhidān, p.692)

* Sarapā 城門とはバリー語にて

Sara = 矢 + pā = 守る、即ち、敵の矢を防ぐ強固なパガンの城門をいう。また一説には Sarapakāsana = 「弓術に秀でた」を意味する城門とも云われている。(That-pon Abhidān, p.653)

アノーヤター王はビルマ全国を統一した最初の王であり、彼以前には「王」と云っても、単に地方の長に過ぎなかった。彼の偉大な業績は仏教を盛んにし、仏教宣布のためには骨身を惜しまなかった、そして数多くのパゴダを建立し、彼の後継者たちもパゴダの建立を競い合った。彼は

常に国民の幸福を心に念じ、労働に従事する者たちに感謝の意を表していた。当時の王として敵に対する取扱いは残忍な点のあったことは免れないが、最も善良で、勇気・敬けん・無慾を象徴した王の一人であった。

第 43 代 ソールー王

(Sawlu)(1077—84)

ソールーはアノーヤター王が王位に即く以前に娶った妃より生れた子であったが、父の偉大な能力と勇気をほとんど受継いでいなかった。アノーヤター王時代の事件のどの一つにもソールーについては何ら記されていない。ただ彼は二つのパゴダ、即ちモンユワ地方にシュエソールー・パゴダとミンブー地方にパウンリン・パゴダを建てた。

彼はアノーヤター王の死後、即位すると同時に父の妃の一人であったキン・ウ（またはマニサンダーとも呼ばれる）と結婚した。このような結婚は今日ならば非倫的行為と見なされるであろうが、当時は前王の妃と結婚することは普通のことと考えられていた。これと同じような例は38代タウンタヂー王の場合にも、また39代クンソー・チャウンピュー王の場合にもうかがわれる。この事は、妃も王権の一部を主張する資格、即ち王位継承者としての資格を保持することを意味していると Harvey は言っている (Outline of Burmese History, p. 26)。

アノーヤター王の時代に王の怒りにふれて逃亡していたチャンジッター（学報12号, p. 111）はシン・アラハンや貴族たちの勧告によって王宮へ召還されたが、以前のマニサンダーであったソールー王の妃と再び関係を通じるようになったことを耳にしたソールーは再びチャンジッターをダラへ追放したが、再度貴族大臣たちの仲立ちによって召還された。

タライン族の反乱

ソールー王と乳兄弟(乳母の実子)に当る^ニガヤマンカン(Ngayamankan:)はダラの太守に任ぜられ、タライン族の都ペゲーを支配した。彼^ニガヤマンカンは独眼流の人であった(Ngayamankān: の kan: は「盲目」を意味する)。

かつて、ソールー王と^ニガヤマンカンはパガンの宮廷にて Kywe-an-kazā: (貝がらで行う一種のとはく) で相興じていたが、^ニガヤマンカンが勝ち、立ち上がって let-pan:-pauk-hkat (ビルマ人は勝負事に勝った時に行う動作で、両腕を両手で交互に打つ) の身振りをして勝ち誇った。ソールーは恥辱を感じて、大いに立腹し、「汝は Kywe-an-kazā: の一勝負に勝ったことをそれ程に誇りと思っているのか。汝が秀れた能力をもっていると思うなら、ペゲー勢を引きいて朕に双向って見よ。」と云った。^ニガヤマンカンは元来腹に一物をもった男であったので、王が云

ったこの言葉をとり上げ、ペグーの都に帰って軍備を整え、パガンに対して反乱を起した。

ンガヤマンカンはパガンへ向って進撃を開始し、タイエッミョー地区のミン・フラの南にあるピードーター島（イラワヂ河中にある一島嶼）に陣を敷いた。ソールー王とチャンジッターはンガヤマンカンの軍を壊滅させようとして共に南下した。チャンジッターはンガヤマンカンが立籠ったピードーター島が強固な要塞地であることを知って、そこまで出撃せず、むしろ敵がパガンに進軍するのを待期してその側面を衝かんとした。しかるに愚かにもソールーはチャンジッターを出し抜いて砦に迫った。詭計に巧みなンガヤマンカンは hnī: (竹片れ) で象の模型を作り、その上に人形を乗せて泥濘の中に置いた。暗い夜であったので象の模型と人形を見て、ソールーは本物だと思い込み象に乗って闘いを挑んだ。ソールーの象はぬかるみにはまりこんでしまったので彼は象から降りて逃げ、榕樹の空ろの中に身を隠した。ソールーの軍は反撃に会って大敗を喫し、屍は砦の周囲の沼地を埋めた。

チャンジッターは一夜中馬を馳せてパガンに着き、戦況を知らせた。大臣たちは彼に即位を望んだ、しかしソールー王に忠誠を誓うチャンジッターは「王の存命を確かめよう。」と言って、ソールーを探しに出発した。一方、ソールーは榕樹の空ろの中に隠れ、食事を三度もとれなかったので、空腹のあまり榕樹の中から出て、ンガヤマンカンの兵士の一人が薪を集めに来て食事をしているのを見て、その兵士に近づき他の者に云わないように口止めして、自分の貴重な指環と食物を交換した。しかし、その兵士は嬉しさのあまり黙っていることができず、その指環を見せびらかしたので、ンガヤマンカンはその指環によってソールーの隠れ場所を知り、直ちに彼を捕え監禁した。

チャンジッターは単身タライン軍の陣地に忍び入って、ソールーを救い出そうとして彼を背負って出ようとした時、ソールーは心の中で「父君アノヤーター王もチャンジッターを罰したことがあった。自分も彼を罰したことがある。自分を救い出すのはその復讐をするためだろう。しかし、ンガヤマンカンは自分とは乳兄弟だから自分を殺すようなことはあるまい」と考えて、「チャンジッターにさらわれるぞっ」と大声にて叫んだので、チャンジッターは「何と愚かな王だ、タライン人の手にかかって、犬か豚のような死に方をするがよい」と言いすてて、ソールーを投げ捨て、危うく逃れてイラワヂ河に跳び込んだ。

ンガヤマンカンはソールーが生きている限り戦いは終らないと考え、ソールーを処刑してしまった。やがてンガヤマンカンはパガンを支配せんものと軍を進め、パガンに降伏を迫った。パガンの民は城壁を閉ざして備えを固め、ンガヤマンカンに向って「チャンジッターはいまだ生きている。一つの池に水牛が2頭 (Aing ta-hku dwìn kywè hnīt-hku lū: tha gè tho), 即ち、国

に二王あることなし。先づチャンジッターと戦え。」と言ってンガヤマンカンを斥けた。

チャンジッターの周囲には人々が集り、やがてチャウセの米産地域であるレードインの11ヶ村を兵站とするほどの兵力を募った。また勢力をもっていたティーフラインの酋長やムソー・ンガズインたちとも結託して、ンガヤマンカンを撃つべく準備を整えた。

やがてチャンジッターは軍を引きいてパガンに向った。タライン軍はチャンジッターの進路を阻もうとして東進しつつあったが、タラインの兵士の間にはチャンジッターの名声を聞いて恐怖の色が濃くなっていた。チャンジッターは猶予をあたえず東進しつつあったタライン軍を破った。彼らはミンカバに退却したが、チャンジッターはなおも猛攻の手をゆるめなかった。戦いに破れたンガヤマンカンは御座船にてイラワヂ河を逃げ下ったが、ムソー・ンガズインが彼を追ひ、ンガヤマンカンの好奇心を誘うために樹上にて不思議な鳥の鳴き声を真似て、ンガヤマンカンがそれを聞こうとして船の窓から顔を出そうとしたところを見る方の眼を弓矢で射貫いたため彼は両眼が見えなくなってその場に倒れた。かくしてパガン王国を脅かさんとしたンガヤマンカンの野望も終りを告げた。

ソーラーはアノーヤター王が残した遺産を継ぐ器ではなかった。ただ世の快樂に耽け、智者の言に耳を傾けようとしなかった。またアノーヤター王が世を去って未完成のままになっていたシュエジゴン・パゴダの建立の継続にも着手せず、在位6年にして終った。

アノーヤター王のタトン攻略後、一時は勢力の衰えていたモン族がベグーの都にてンガヤマンカンの下に勢力を回復し、ビルマ王ソーラーと争って彼を打負かしたことはビルマ人にとっては民族戦における一つの汚点となったが、それにひきかえチャンジッターはアノーヤター王の努力を無駄にせず、チャウセの米倉地帯の11ヶ村を彼の手中に納め、巧みな作戦によって宿敵ンガヤマンカンを撃ち、パガン王家の面目を一新した。

ソーラーの死後、チャンジッターは全国民の要望に応じて王位についた。

第44代チャンジッター王 (Kyanzithā:)

(1084年～1112年)

チャンジッターについては、アノーヤター王並びにソーラー王の時代にしばしば大いなる武勲を立てたが、さらに概略すれば、学報第12号 p.109 の中頃に「アノーヤター王とウェタリーより来たピンサ・カリヤーニ王妃との間に生れたチャンジッター王子」と述べた如く、チャンジッターの母は名前からも察せられる通り、明らかにインド人であった。ピンサ・カリヤーニが著しい前兆と共に懐妊したことが U Hpo Kyā: によれば、

「アノーヤター王は従者のつげ口によってピンサ・カリヤーニの不義を疑い、サガイン地方のパイエインマに彼女を幽閉したが、その時すでに彼女はアノーヤター王の子を宿していた。その子が後のチャンジッター王子である。」まではウー・オン・マウンやウー・ミン・ハンその他の歴史家とも共通しているが、なお「チャンジッターを妊っている時、北部地帯の *大地震によって前兆が示された。アノーヤター王はバラモンの占星術師に命じて占なわせたところ、その頃、北部地方に王位に即く者が現われるであろうと言ったので、アノーヤター王は恐れ、チャンジッターが母の胎内にいた頃、妊娠中であった多くの女や生れたばかりの乳呑児及び牧童の年頃（12才位）以下の数多くの少年たちを家来に命じて殺害させた。その時、竜神の守りによってチャンジッターは生き残っていたということである」と書かれているが、このことは一般ビルマ人の口誦や国語教科書（MyanmaHpatsa-thit; Saduththa-dan; p.118～120）にも述べられている。

この場合、人々は占星術師の予言を熱烈に信じていたことや強大な守護力をもつ竜神を信仰していたこと、即ち、Nat 信仰がいかに盛んであったか。また、王が生命、地位、財産を守るために多くの生命を奪ったこと等に注目すべきである。

* 地震はビルマ語でnga yin hlut [nga yinという怪物がゆすぶる]であるが、nga yinという伝説上の怪物が4匹で地球を支えていて、彼らが位置を変えると地震が起ると云われる。日本でも昔、地球の下になまぐす寝、それが動くとき地震が起ると云われていたのと、やゝ似ている。ビルマでは地震はまれにしか起らないが、昔はこれを nat 信仰に結びつけて、バラモンの占星術師にその徴候を占ってもらう習しがあった。

その後、アノーヤター王は再びバラモンに^{さんだつ}篡奪者はこの世からいなくなったかと尋ねると、「王位に即く人は今すでに僧侶になりました」と答えた。アノーヤター王は「僧侶は殺すべきでない、殺せない」と云って、すべての僧侶を宮殿へ招き、馳走をもてなして、自ら彼らに給仕した。そして僧侶となったチャンジッターが水を飲もうとした時、彼の口の中から炎が輝くのを見て、アノーヤター王は驚き、この人こそ王位に即く者であろうと思い、バラモンに「この者は朕の王位を奪うであろうか」と尋ねると、バラモンたちは「王の後、一代を経てから王になれるでしょう、そして王の敵となる者ではございません」と申し上げると、「汝らは今はじめて、その事を朕に言った。彼が朕の王位を奪う者であろうと思い込んでいた。ああ何と数多くの生命を滅してしまったことか！」と云って大いに後悔した。その後、この僧侶を還俗せしめて、チャンジッターと名のらせ、王の元に仕えさせた。“Kyanzitthā:”とは「生き残った兵士」を意味する。

ソールー王の死によって、チャンジッターの戴冠式が行われ、大僧正シン・アラハンによって先導され、彼は獅子座の王位に即いた。（大僧正は王の師ではあるが、司祭者ではないから、王

の戴冠は行わない。戴冠はバラモン司祭の下に行われたものである。)そして彼の父であるアノーヤター王並びに彼の異腹の兄であるソールー王の妃となっていた太妃キン・ウと結婚した。キン・ウ即ち、マニサンダのためにチャンジッターはそれまで2度も追放の憂目を見なければならなかったことがあったが、彼女は引続いて三代の王の妃となったわけである。

チャンジッターはまた逃亡中、チャウン・ピュー・ヤツという所の僧正の寺院に隠れ住んでいた頃、僧正の姪に当たるタンブーラ (Thambūla) と夫婦の契りを結んでいた。アノーヤター王の死後、ソールー王の時、チャンジッターはパガンへ呼び戻されたが、その際、タンブーラは妊娠していたので、彼女に指環をあたえて「もし女子が生れたら、この指環を売って生計を立てよ。そして男子が生れたら、その子と一緒に指環をもって訪ねてくるように」と言い残してソールー王の元へ帰って行った。

チャンジッター王には王妃が4人あった。その名は、

- 1) アペ・ヤタナー (Apè-Yatanā)
- 2) キン・ウ (Hkin-ū), 即ち、マニサンダー (Manisandā)
- 3) タンブーラ (Thambūla)
- 4) キンタン (Hkin-tan)

これらの4人はチャンジッターの生涯に深い関係を持ち、愛情、恩恵、誠実等の美德を認めて彼が任命した王妃たちであった。従って今日でもビルマ人がビルマ女性の誇りとして語るのを時折耳にしたことがある。この4人の概略を述べると、

- 1) アペ・ヤタナーはチャンジッターが生れたパイエンマ地方の領主の娘で、彼の最初の愛人であった。この王妃との間に生れたシュエエインティ (Shwe-ein-thi) はチャンジッター王の一人娘であった。(シュエエインティについては後述する。)
- 2) マニサンダー、またはキン・ウは彼の二番目の愛人であり、既述した如く、アノーヤター王の時代に一度、ソールー王の時代に一度、計2回も彼女のために逃避せねばならなかった。王二代の妃になってから後に、前世よりの宿縁により、チャンジッターの妃になったので、特に彼女に対して深い愛情を感じた。
- 3) チャンジッターの第一回目の逃亡中に知合ったタンブーラは彼の三番目の愛人であった。彼が即位して2年の歳月が経った頃、以前チャウンピューに残してきたタンブーラが男の子の手をひき、約束の指環をもって、パガンの都にチャンジッター王を訪れてきた。王は昔の彼女の恩恵と誠実を考慮して優しく迎え入れた。そして彼女に「三界華鬘」(Ü:-hsauk-pan: Triloka-watansaka) という美称を与えて第四王妃とした。タンブーラが連れてきた男の子は後にチャ

ンジッターの業績を4ヶ国語にて記したミヤ・ゼダイ石柱碑文 (Myazedi-kyauksā) を後世に残したヤザクマール (Yazakumar) 王子である。(ヤザクマールについては後述する。)

- 4) キンタンはチャンジッターがンガヤマンカンと闘っていた頃、彼に協力したティーラインの酋長の娘で、彼女をも王妃に任じた。

今や万民の王となったチャンジッターは新しく宮殿を建て直し、デルタ地帯における彼の思い出を記録するためにタライン語、即ちモン語にて多くの碑文を刻せしめた。その中には文学として価値あるものが若干見出される。

前述したチャンジッター王とアペヤタナー王妃との間に生れたシュエ・エインティはインド系のパティツカヤー (Patikkayā) 王子と互いに愛し合うようになったが、二人の結婚について、チャンジッター王は大臣貴族たちと相談した結果、それはインドにビルマの国土を委ねるに等しいものであるという理由で、彼らが反対したため、王は彼らの言葉をとりあげて、パティツカヤー王子との結婚を破談にした。そしてソールー王の息子であるソーユン (Sawyun:) に嫁がせた。パティツカヤー王子はシン・アラハンよりその事を聞き、失望の末、自殺して果てた。

シュエエインティとパティツカヤー王子との事情について Myawadi Vol. 184, p.5 には次の如く記されている。

『(原文省略) 東の方には先王アノーヤター王の宮居、北にはピューメンティ王時代に退治された怪鳥の頭蓋骨の埋葬所、西には小型の仏像を安置した社 (muhto または mahtaw) があり。チャンジッター王は王座に登る時、先づナツ神 (英雄神) を礼拝する。王には4人の王妃があり、即ち、アペヤタナー、ウッター王の王女であったキン・ウ、ティーライン酋長の娘キン・タン、チャウンピューヤットの僧正の姪であり、三界華鬘の称号をもつタンブーラ等であり、その中、第一王妃であるアペヤタナーはシュエエインティを生む。大王は娘シュエエインティを大いに慈くしみ、タビンタイン^{でん}殿 (Tabin-taing-nan: = 王位継承者と婚約せる王女が住む御殿) に住まわせた。そのことをパティツカヤー王子は聞き、宝石を口にふくんで空中を通りぬけ、御殿に入り込んだ。シュエエインティは供の者たちに銀貨をつかませて、相愛する二人は密会する。その事をチャンジッター王が知り、大臣たちを呼んでパティツカヤー王子との縁組が適当であるか、それとも我が君の孫に当るソーユン (アノーヤター王からは孫に当るが、チャンジッターからは甥に当る) との縁組が適当であるかを相談し合った。貴族高官たちはシュエエインティ王女をパティツカヤー王子に嫁がせるならば、年月を経るうちにはビルマの国土はインドのものになるであろう、とチャンジッター王に進言したので、ソールーの息子である^{びつこ}跛のソーユンに嫁がせることにして、彼を王位継承者とした。その頃 (この事情を知っていた) シン・アラハンは勤

行のためマハボディへ赴むかんとしていたが、パティツカヤー王子が口に宝石をふくんで空を通ってやって来るのを知って彼を留め、彼女がソーユンと結婚したことを話した。王子は口を開き、宝石を口の中より落として、自らも空より落ち、息絶えた。また他の記録 (Myawadi Vol. 184, p. 6) では、パティツカヤーは宝石をちりばめた指環をくわえて天空に達し、シン・アラハンに会い、シュエエインティとソーユンとの結婚のことを聞き、「我が愛する人を得られなければ、我が身を死に到らしめよ。」と云って食を断って果てた。シン・アラハンはあの世において二人が結ばれんことを祈り、ワー (Wā:) という所に彼の死体を葬った。』

その後やがて、ソーユンとシュエエインティの間に男子が生れ、アラウン・スイートウーと命名された。〔Alaung:=未完成のもの; 菩薩+Sithū=勝利者; 英雄の意。〕チャンジッターは大いに喜び、孫の頭上に王冠を載せて「汝らの王を見よ、今日より朕はただ彼の摂政となるのみである。」と布告した。チャンジッターがこの幼い孫であるアラウン・スイートウーに王冠をゆづったのは、自分には男子が生れていないと思っていたからであろうが、実は前述した通り、タンブーラがチャンジッターの男の子を生み、約束の指環をもってパガンを訪れたが、その時には、すでにチャンジッターはアラウン・スイートウーに王位を与えていたのでそれを取り消すわけにはゆかなかった。しかし、チャンジッターはタンブーラの子をも大そう慈くしみ、世間ではよく「孫が先端で、息子が基」(Myē: gā: a-hpyā: thā: gā: a-yin:) と云われるが、今は「孫が基で、息子が末」(Myē: gā: a-yin:—thā: gā: a-hpyā:) になってしまった、と言ったそうである。

彼はその王子を北アラカン山地七地区の領主に任じた、即ち、ゼヤケッタラー王子 (Zeya hket-tara) である、より一般にはヤザクマール王子と呼ばれる。ヤザクマール王子が領有したという北アラカン7地区は現在の Min: dun:, Min: tap, Ba-dein:, Nga-hpè 等の地域に当るのである。北アラカン地方はダニヤワディ (Dhanyawadi) と呼ばれ、「光栄の都」または「米の豊かな所」を意味し、その両方に通じている。なぜならば、その地方には米も豊富であり、高僧智者が輩出しているからである。現在、英語名では Akyab として知られている有名な所である。

アラカン侵入

南アラカンの太守テッミンガドン (Thetmin:gadon) はビルマ国境の村々を侵したので、その膺懲のためにアラカンへ軍が送られた。しかし、シン・アラハンの忠告によって、テッミンガドンは訓誡されたのみで、彼の生命は助けられた。ビルマ諸王が欲していたマハムニ像はアノーヤター王時代に行われたアラカン征服の時と同じように、余りにも重いために、パガンへ運び去ることは再び失敗に終わった。この事件については U Hpo: Kya: のビルマ史には全然ふれられて

いない。

アーナンダー寺院建立

その頃、インドでは仏教が全く衰え、信仰篤い人々は迫害をのがれて海外に移住した。仏教の一中心地としてのパガンの名はすでにインドにまで知られていた。チャンジッターは8人のインド人の僧侶を招待し、彼らからオリッサのウダヤギリ丘にあるアナンタ (Ananta) 窟院について話をきいた。彼はこれをモデルとして、かのアーナンダー寺院 (Ānandā Pahtō:-daw-gyi:) の建立に着工し、1090年に完成した。

アーナンダー寺院はパガンの諸仏塔、諸寺院の中でも最も神聖なものの一つとされている。寺院の一辺は200フィート近くもあり、切妻風の突出した入口をもっている。ちょうど、タッピンニュ寺院が全智全能の神 (Tathagata) を象徴するように、アーナンダー寺院は無限の智慧 (般若) Ananta pañña を表象している。Ananta という名称はここに由来しており、それが後には仏陀の従兄弟の名前 Ānandā (阿難陀) を聯想するに至った。この種の寺院はビルマ語で gū と呼ばれるが、側廊・柱・壁龕などが宛かも山腹を深く掘りぬいて造られたかのように見えるので、如何にもこれは窟堂である。堂内には様々の仏像、仏陀の前生の姿像、550の Jātaka (本生譚) 劇を図説した飾板、そして特にチャンジッター王と彼の師シン・アラハンの石像が見出される。実にこの仏寺は宗教、教育、歴史等に関し最も有名な一基である。

その他にもチャンジッターは彼の生れた土地、住んだことのある土地、逃亡して来た土地等記憶すべき所に数多くのパゴダを建立した。

例えば、サガインには彼の生地を記念してパイエインマ・パゴダと、かつて彼が身を潜めたことのある坑を記念してシュエ・ドウイン・アウン・パゴダ (Shwe-dwin-aung-Payā:) を建て、パコックにはイエサデヨに3つの仏塔を建て、ミンヂャンではナガヨン・パゴダ (Nagā: yon Payā:) と彼の配下であった投槍の名手を記念してフランピャンヂェツ・パゴダ (Hlan-pyan-gyet Payā:)、セイロン王から贈られた9個の仏舍利を祀ったミン・オー・チャント・パゴダ、彼の母ピンサカリヤーニーがアノーヤター王の花嫁として迎えられた場所を記念してプシットツ・パゴダ等を建立した。さらにミンブーにシュエセッドー・パゴダ (Shwe Set-daw Payā:) を造営し、*ベンガルのボッダ・ガヤ (Buddha-gaya, 仏陀伽耶) 「釈尊はこの菩提樹の下で悟りを開いた」の祠堂を復興した。

* Harvey のビルマ史31頁には “at Buddhagaya in Bengal” と書かれており、ウオン・マウンのものであれば、104頁に“ビンガラー (即ち、バンガル州) に含まれる Bodhi bin (菩提樹) (のあるボッダガヤ)

と記されているが、ボッダガヤは現在ビハール州に含まれている。

ボッダガヤの祠堂復興に関して“A Guide to the History of Burma”(英語で書かれているが、著者名も発行日も不明、在緬中に買った本)には、「チャンジッターはチョーラ国の公子に仏教を説き、彼(チョーラ国公子)がチャンジッター王の要求に応じてボッダガヤの祠堂を修復した。」即ち、“He (Kyanzittha) preached Buddhism to the Chola Lord, who restored the shrine on Buddha Gaya at Kyanzittha’s request”と述べられており、Harvey も、チャンジッターがチョーラ国の公子に仏教を説き勧め、ボッダガヤの祠堂を修復した最初のビルマ王である、と記している。

このように英語にて書かれたビルマ史には Chola Lord について記述されているが、ビルマ語にて書かれたビルマ史では U On Maung を除いてはチョーラ国の公子については何の記述もない。ついであるが、中国語名では「注韋国」または「珠利耶」と記されている。宋史、外国伝に「注韋国、自古不通中国、大中祥符八年、其国主羅茶羅乍、遣使奉表来貢。」とあり。

チョーラ国公子について、ウ・オン・マウンのビルマ史には次のように述べられている。

『このインドの王子(チョーラ国公子をさす)に関してはビルマ史にもモン史にも記述は見当たらない。しかし、シュエ・サンドー・パゴダに発見された碑文の一つには、ソーラ国王(パガン国王、即ちチャンジッターのこと)は一人のチョーリー王子(チョーラ公子)に会い、もし全ビルマが仏教徒となるならば、チョーラ国の王女とパガン国王家との婚姻も可能になり、両国は睦まじく同盟国となるであろう、と話し合った。また、その碑文によれば、パガン王家のどの王の時代であったかは不明であるが、インド史には、インド南部のマドラス地方において西暦1011年より1052年まで支配した初代 Rājindarā Hkya-lā (Chola) Deva 王(985年～1035年)はペゲー(ビルマ側)を戦い占領した。その養子に当たる2代目 Rājindarā Hkya lā 王は1070年より1108年まで支配した、と書かれている。そのチョーラ国王の支配していた年代はちょうどチャンジッター王の時代に相当し、現在の歴史家は、このインド王子はチャンジッター王と会い、仏教について意見を交換し、彼の言葉に感化されて、チャンジッターは大臣高官たちをベンガルにある(その樹の下で釈迦が悟りを開いたという)菩提樹の元へ赴かせ、荒廃せるボッダガヤの祠堂を修復させた、と考えている。』

なお Chola 国に関して「ハーヴィのビルマ史」の日本語訳(五十嵐智昭氏)の p. 14 の註に次の通り書かれている。

〔注〕 南インドにあったタミール族の一王国。史上知らるゝ此国最古の王カリッカル(又はカリカーラ、西紀 100 年)はプハールに都を興せりと言う。九世紀の末、その王アーディトヤはパンドヤ族と結んでバララヴァ族を滅ぼし、その子バラータカー一世(907 年即位)は在位四十二年、パンドヤ族を追放

し、セイロンに入寇した。十一世紀の頃その勢はタミール諸国を圧し、ラーチェンドラ・チョーラ・デーヴァー世（985—1035 年）が父王より継承せる領土は今のマドラス州の殆んど全部に及んだ。王は更に北方に遠征してビハール及びベンゴール王マヒーパーラを破り、トリチノポリ地方に新首都ガンガーイコーンダ・チョーラプラムを建設した、チョーラ王朝は十三世紀以後漸次衰へ、1310年回教徒の侵入を受け、次いで、ヴィヂャナガル帝国の興起と共に滅亡した。尙お前記チョーラデーヴァー世はベンゴール湾を超えてベグーを占領したとも言われるが、その論拠は頗る薄弱である。

シュエジゴン・パゴダの継続建立

父君アノーヤター王の時代にはシュエジゴンはパゴダの周囲の段（pissayan）の三段目までしか進行していなかったので、引き続き建立が進められた。石材や煉瓦等はパガンの東 6 哩の所にあるトゥーユイン山から仏塔まで 2 列に並んだ人々の手から手へ渡して運ばれた。チャンジッターは太陽の暑さに耐えられるようにとタマリンド樹を植えさせて陰を作り、日夜竣工をはかどらせた。

シュエジゴン・パゴダは他のパゴダの建築様式とは全く異なり、円塔形の堂々たる構造で、ビルマの円形パゴダの原型となったものである。1059年、アノーヤター王によって起工され、彼の存命中には竣工するに至らなかったがチャンジッター王によって完成された。パゴダの周辺には壁画がえがかれていて、仏陀の前世の物語が図示されている。内部には仏陀の前額骨と仏牙が収蔵されていて、全ビルマの仏教徒たちの尊崇のパゴダとなっている。パゴダの四周にはグプタ様式の釈迦立像が安置された小寺院がとり巻いている。パゴダの東入口の左右に立っている二本の角形石柱には古代モン語にてパゴダの由来が書かれている。壇の東北隅には仏教時代以前のビルマのナツ神であった 37 柱のナツ像が小室の中に安置されている。毎年ここでは盛大なパゴダの祭が催されることになっている。シュエジゴン・パゴダの碑文は全部で 24 ケ文ありて、いずれもビルマ語とモン語で書き記されている。

パゴダについて

仏塔は一般にパゴダとして知られているけれども、ビルマ語では Zedidaw と呼ばれ、又は口語では hpayā: gyī: が多く用いられる。Zedidaw の zedi はパーリー語の cetiya から来ている。ネパール語では chaitya, またタイ語では chedi と呼ばれる語に相当する。-daw はビルマ語では敬称を表わすのに用いられる接辞である。また Hpayā:-gyī: の hpayā: は古くは hpurā, 現在でもカチン語の Northern Singpho では Phra と発音され、中国語では「福爺」がこれに当てられていて、元来は仏陀を意味していた。ビルマ語では仏陀以外に王や僧侶に対する尊称としても用いられる。Hpayā: に通例 -gyī: (「大きい、偉大な」の意) が附加されて hpayā: gyī:

と呼ばれ、パゴダの意味に用いられている。

ところで英語の pagoda は Singhalese の “Dagoba” という語が音位転換されたものである。その Dagoba はサンスクリット語の Dhatu Garbha (a shrine for relics) から来ている。

釈尊は前世において、米飯を塚の形にして彼の墓の上に積み重ねられんことを願い、また彼の母なる摩耶夫人の胎内にて胎児の仏陀が恰も蓮のつぼみの如くあらんことを願った。この二つの願いが共にパゴダの建築構想をなしたと云われている。

ビルマのパゴダには次の4種類 (zedi lē: bā:) がある。

- (1) Dhatu zedi——聖遺骨を保存する。
- (2) Pari-bhoga zedi——聖器物、僧衣等を保存する。
- (3) Uddissaka zedi——仏像を保存する。
- (4) Dhamma zedi——仏典を保存する。

例えば、ラングーンの Shwe Dagon Zedidaw は(1)及び(2)の分類に属す。

ビルマの仏教徒が誰しも自ら好んでパゴダの建立者たらんと欲することに関して、George Scott は云う。

「パゴダの建立者は地上の聖者と見なされ、彼が死亡した時は最後の救済を得る。もちろん村の旅舎を建築する人、仏像や鐘を寄進する人、あるいは僧院を建設する人も多くの功德を得て、臨終の際には幸福な輪廻が保証される。しかしパゴダの建立者は災厄を免れ、その靈魂は円満具足し、功德が罪業に勝り、かくて彼は聖なる安住の地に達するのである。とに角、この自慰の信念だけは如何に罪業の深い悪人といえども、固く心の底に秘めているのである。このような果報が待ち構えているのであるから、ビルマの仏教徒はこの目的のために蓄財し、国内到る所にパゴダをおびただしく建てるのは怪しむに足らない云々。」

パガン王家が建寺王朝（またはパゴダ建立王朝）と呼ばれる通り、パガン時代には実におびただしく多数のパゴダが建立された。その昔、パガンの都は現在ニャウン・ウ (Nyaung U) と呼ばれる町を中心として栄えていたのであるが、そこは東西南北どちらを向いても算え切れないほどのパゴダが立並んでいる。（私も実際にそれを見たことがある）

現在この地域には5000基以上のパゴダが建っているが、パガン時代にはこの3倍以上のパゴダが建立されていたという。その後、戦禍その他の理由で破壊されたり、朽ち果ててしまったのであろう。もちろんパゴダはパガンのみでなくビルマ国中到处に建てられている。

ビルマは実にパゴダの国である。その数は恐らくセイロンに建てられたすべてのパゴダ、またチベット人や中国人によって建てられた仏塔よりはるかに多いであろう、と云われている。どん

な寒村や今は人が住んでいないジャングルの中にさえ、昔パゴダが建てられた形跡が目につく。

パガン王朝によって為し遂げられた事業の中で今日にまで残されている最も世に知られたものはその寺院とパゴダである。パゴダこそ、建築学の谷口吉郎博士が書かれた書評文の一節にある如く「人間の築きあげた時代の祈りであり、当時の建設力を示す記念物である。」

また Thamaing: (パゴダ由来記) はそれぞれのパゴダの由緒来歴を物語るものであるが、同時に建立者たる王の事蹟及び宗教とは関係のない当時の事件についても記録しているものであって、Yāzawin (王朝史) 及び ēgyin: その他の詩歌と共に史実を伝えることを助けている。

ミヤゼディ碑文

チャンジッターの長い数奇な生涯も終りに近づきつつあった頃、彼とタンブーラとの間に生れた一子ヤザクマールはパガンの南にあるミヤゼディにて荘厳なる供養を献げ、父君チャンジッターの業績を讃えた碑文を刻した石柱を建てた。これがミヤゼディ石柱碑文 (Mybzedi Kyauk-sā) であり、パガン王朝初期の諸王の年代を決定している。石柱の四面には同一の内容が Pali, Mon, Pyu, Burmese の四つの言語にて記されており、それによって1911年まで知られなかったピュー語が解読されるに至り、かつては大部族を成していたピュー族が現在ほとんどその痕跡を残していないけれども、ビルマ族と同一のものでなかったことがうかがわれる。このようにミヤゼディ碑文は年代学上、また言語学上重大な意義をもっている。

年代について大切なことはミヤゼディ碑文に書かれてあるチャンジッターの即位が仏暦1628年であるという。1628年より1182年 (12号, 106 頁参照) を引けばビルマ暦 (またはパガン暦) の446年にチャンジッターが王位に即いたことが解る。ゼデヤワンタ註解書 (Cetiawansa Kahtakyan:) の年代表はこの碑文の年代表と一致している。ところが Hmannan: Yāzawin p. 306 では426年になっているので、20年の差が生じる。しかし、この碑文の年代の方が正しいと考えられる。なぜならばその碑文はチャンジッター王時代に刻まれた碑文であると信じられるからである。従ってアノーヤター王の即位がビルマ暦406年 (西暦1044年) であることを知れば、彼以後のパガン暦代の王の年代が明確になってくる。

“Myazedi Kyauksā-lē: hbāthā” (Myazedi Discription in four languages) よりミヤゼディ碑文の4原語を示すことは印刷の関係上困難のため、現代ビルマ語訳を romanize して、その意味を紹介すると、

Pagan Myazedi Myanmar Kyauksā
パガンのミヤゼディ ビルマ語 (古代) 碑文

Myanmā bhatha pyan so hkyet
ビルマ 語(現代) 訳

Thiri, Namoboddāya, hpayā: thahkin thāthanā- ahnit tit- htaung- hkyauk- yā- hnit-
栄光あれ、仏に帰命し奉る 仏暦 1628年(西暦1084年)

hse- shit- hnit lun le byī ya gā : i Arimaddanapur mi thaw pyi hnaik thirītribhuwa-
・ (過ぎて) 当アリマッダナプル(パガン)という都においてティリートリブーワ

nāditradhamma- yāza mi thaw min: min: hpyit i.
ナーディトラダンマヤーザ(チャンジッター王の別名) という王が支配す

Hto min: i hkyitzwā thaw ma-yā: (mi-hpa- yā:) ta- yauk thaw gā: Trilokawatanthakā-
その 王 の 一人の 寵 妃 は 三界華鬘

dewī ami shi i, hto mayā: i thā: (tabā:) mū gā: Yāzakumār ami shi i.
と謂い その 妃 の一人の子はヤーザクマールと名づく。

Hto min: gā: kywun thon: ywā te: hkyitzwā thaw mayā: ā: pē: i. Hto hkyitzwā thaw
王 は 三つの 莊園を 寵 妃 に授く。 その 妃

mayā: the gē ya gā:, hto mayā: i tanhsā hnin hto kywun thon: ywā (dō go pin) hto
の没するや 彼女の装身具 と共に かの 三つの 莊園 までをも その

hkyitzwā thaw mayā: i thā: Yāzakumār ami shi thaw (thū) ā: min: (gyī: ga) pē: le i.
子ヤーザクマールと名づくるものに 大王は与う。

Hto min: ahnit hnit- hse- shit- hnit min: mū byī: nauk the daw yan nā (daw mū) thaw
治世 28年 にして 病に 倒れ、

ahkā hnaik hto Yāzakumār ami shi thaw hkyit mayā: i thā: (thi) mi mi (ā:) (kywē:) mwē:
時に ヤーザクマール、 即ち 妃 の 息子は 自分を 愛育し

pe thaw min: gyī i kyē: zū: go auk me ya gā: shwe ati (pyī:) thaw hpayā: thahkin ahsin:
給うた 大王 の 恩 に 感じ 黄金 の 仏 像を

pyu ywe kye- nap (hnit-thet) thaw ahkā i tho mein i. “I shwe hpayā: gā: ngā i thahkin
造り 御前に示して かく 言う。 この黄金像は 我が主父君

ahpo akywunok pyu tha ti:. Kywun thon: ywā akywunok ā: ngā thahkin pē: gē thi go lē:
のために 造りたるものなり。 三つの 莊園を 我 に 与え給うたことを

i shwe hpayā: ā: akywunok pē: (hlū) i”.
この黄金 仏に 我は 捧げん。

Hto yaw ahkā min: (gyī: thi) hnit lo (won: myauk) le ya gā: kaung: hla i ti: kaung: hla
その 時 王は 喜びの 余り 称讃の言葉を

i ti: (kaung: le zwa) hu mein i.
繰返す。

Thingā-daw-gyī: Mahā-hter, thingā-daw-gyī: Muggaliputtatittha-hter, thingā-daw-gyī:
大僧正 ムッガリプッタティッサ僧正

Thumedha pandita, thingā-daw-gyī: Brahma- pāla, thingā-daw-gyī: Brahmadeva, thingā-
スメダ パンデイタ ブラフマ パーラ ブラフマデーワ

daw-gyī: Thona, thingā-daw-gyī: Thenawara- pandita, hto thahkin dō (myet) hmauk daw
ソーナ セーナワラ パンデイタ以上の尊者たちの 御前に

hnaik pin, min: gyī: ye (set) thon: (hkyā daw mū) i.
大王は灌水供養を 捧ぐ

Hto nauk Yāzakumār ami shi thaw (hkyit mayā: i) thā: (di) hto shwe hpayā: (go) htapanā
その 後 ヤーザクマールは かの 黄金 仏 を祀る

i. Shwe ahtwut lyin shi thaw kū (go le:) pyu i. Pyu byi: nauk i gū-hpayā: hlū thaw ahkā
(また) 黄金の九輪を 以てした 窟院をも建立し, なお 落慶供養に際し,

dwin Thetmunalon ta-ywā, Rape ta-ywā, Hanbo ta-ywā, i kywun thon: ywā yū ywe (hlū
セムナロン 莊園 ラベ莊園, ハンボ 莊園 これら三つの 莊園を 寄進す。

le) i. Hto Yāzakumār ami shi thaw (hkyit mayā: i) thā: (di) i gū-hpayā: ā: ye (set) thon:
ヤーザクマール, 即ち 妃の 子は この祠堂 に 灌水供養を

lyet i tho mein i.
捧げて かく 言う。(祈る)

“Ī ngā (kaung:) hmu gā: thabbanyuta nyan pinyā ya an thaw a-kyauṅ: hpyit ze tha tī:
この 我が 功德を以て 菩提を 成ぜ しめ給わんことを

ngā naung ngā thā: lē: gaung:, ngā myē: lē: gaung:, ngā a-hswe lē: gaung:, thū tit htū:
今より後, 我が子も 我が孫 も 我が一族 共に 一切諸人

lē: gaung:, i hpayā: ā: ngā hlū gē thaw kywun (do ā:) a-hneip a-set pyu mū gā: Arimet-
御仏 に 献げ 奉れる寺奴 どもを苦しめるもの あらば 至尊弥勒

taya-hpayā: thahkin ma hpū: ya ze (tha tī:).”
仏に 値遇すること契わざるべし, と。

() 内の語は碑文原語の意味内容を補うために現代ビルマ語訳に付加されたもの。

かくしてチャンジッターは宗教, 政治, 文学等に多大の貢献をなし, 即位後28年, 70才にして彼の生涯を終えた。

第45代アラウン・スィートゥ王

(Alaung: Sithū) (1112~1167)

チャンジッター王の後を継いで, 彼の孫 *アラウン・スィートゥが即位した。彼は先づ各地の叛乱軍を鎮圧した。その後1114年に彼の宮廷は100人余りの流賊 (Dāmyā:) の一団に襲われたが, 賊たちはかえって宮廷を護衛する兵士たちによって皆殺しになった。

前述した南アラカンの太守テミングアドンは再び国境の村々を侵したので, アラウン・スィートゥ王はビルマ軍をアラカンに送った。テミングアドンは処刑されて, 彼の首は王の許に届けられた。しかし, ある夜, 王は夢の中にて, マハーギリ・ナツ神 (第12号, p. 103~104参照) が彼の枕辺に立ち, かつて前世においてテミングアドンがマハーギリ・ナツ兄妹と同信であったことを語り, 彼を死に至らしめたことに対して王を責めた。そこで王はテミングアドンの首を丁重に宝石をちりばめた小箱に収めてトゥエイン山の頂に祀った。その後, 人々はこの山にて毎年ナツ祭を行うようになった。

* アラウンスィートウは別名をティリゼットウル (Thirizeyathur), またはシェグーダーヤカー (Shwe

gūdāyakā), またはチェッドーシェ (Hkyet-daw- she) またはナラパティシートウ (Narapatisithū)
(第48代のナラパティシートウ王と同名であるが別人) 等と種々呼ばれている。

その後、ビルマ南端のテナッセリム地方に反乱が起り、王自らがその地に赴いて、それを鎮圧した。その都メルギー〔一般にメルギー、またはマ〜ギィ (Mergui) と英語名で呼ばれているが、ビルマ名は Myeit-Myo〕に建てられたパーリー碑文はパガン王朝の勢力がかってこの地にまで及んだことを示している。

シン・アラハンの最後

アラウンシートゥがテナッセリム遠征より帰ってまもなくシン・アラハンは1115年に81才にしてこの世を去った。彼は一青年求道者として誓いを立ててタトンを出ち、パガンに近い森の草庵に一人住いをしていた頃より幾多の事件を目撃してきた。彼は今や幾百幾千の精舎の管長として認められた一王国の大僧正となり、多くの人々に仏法を弘めた。彼はアノーヤターの族長として支配していた領土が拡大なパガン王国にまで発展するのを見てきた。彼はまた4人の国王の信頼された助言者となり、そのうち3人の王の戴冠式に列している。またアノーヤター王をして邪教アリー (第12号, p. 108) を追放するように仕向けることにより人々を邪教の束縛より脱せしめ、純粋な仏教を説いた。彼はまたアーナンダー寺院の九輪が天空に聳立するのを見て、それが当時の最高芸術に靈感をあたえるものであり、人々をして仏法に奉仕せしめんとする宗教運動を予言するかの如く感じた。彼が為し遂げた大事業は急速に発展していった、そして彼が点じた火は決して消えるものではなく、彼の献身せる弟子たちが臨終の床にある師の手からたいまつ火を受継がんとしていることを知りつつ永久に目を閉じることができた。

彼の弟子であったパンタグー (Panthagu) が大僧正としてシン・アラハンの後を継いだ。

北アラカン遠征

チャンジッター王の時代に、北アラカンのピンサの都を支配していたミン・ビルー (Min: Bilū:) は大臣である篡奪者ティンカーによって殺害され、王位を奪われた。その子ミン・イエー・パヤ (Min: Yēhpaya) は一族と共にひそかにアラカン山脈を越えてパガンに身をひそめ、チャンジッターにかくまわれていた。その内、ミン・イエー・パヤには息子レッヤー・ミンナン (Let-yā Min: nan) と娘シュエグーター (Shwe Gūthā) が生れた。チャンジッターは機を見てアラカン王位を奪った篡奪者を廃位してミン・イエー・パヤを復位させようと計画していた。ところがパガンの政務に忙殺されていたためにそれを実行することができない内に彼は死に、パガンの王

位を孫のアラウン・スィートゥにゆづった。そのためにチャンジッターの計画は実行されないままになっていた。

年月を経て、ミン・イェー・パヤも身体が衰えて死が近づいてきたことを知り、息子のレッヤーミンナンと娘のシュエグーターを枕辺に呼び、「アラウン・スィートゥ王には象馬隊や歩兵隊の数も多く、アラカンの王位を奪還するためには王にすぎるのみである。我なき後は**洗髪式の際には王にアラカンのことを思い出して貰うように頭髪をアラカン風に結うように」と言って息をひきとった。やがてアラウン・スィートゥ王が洗髪式を催す時が来た。レッヤーミンナンは父が言った通りに、髪をアラカン風に後ろに結んで王によく見えるように振舞った。王はそれを見て「不吉な後ろ髪を結うべき場合か」と尋ねた。その時レッヤーミンナンは「私たちはアラカンの王位に復する日を待ってきましたがもう年月がずい分過ぎてしまいました、それでアラカンのことを懐しく思うあまりアラカン風に髪を結うたのであります。」と申し上げた。アラウン・スィートゥ王はその言葉を聞いた時「なるほどそうであったか。」と祖父チャンジッターからきいていたことを認め、ビルマ軍をレッヤーミンナンにひきいさせて陸路よりアラカンに向わせ、タライン軍をタメイン・ピャッサ (Thamein Hpyatsa) にひきいさせて海路より攻めさせた。初めの戦闘では海より攻めたタライン軍は敗北を喫し、ビルマ軍も撃退されたので、アラウン・スィートゥは軍を増強した。1118年ビルマ・タライン軍はついに成功し、篡奪者を亡ぼして、レッヤーミンナンをアラカンの王位に復させた。

Harvey のビルマ史では、この時にも、以前のアラカン遠征の場合と同じく、マハームニの祠堂が荒され、ビルマ兵はマハームニ像の背面の黄金をはぎ取り、タライン兵は像の片脚を持ち去った。と記されている。

レッヤーミンナンは祖父の王位を回復し、その返礼としてアラウン・スィートゥのために何を為すべきかを申し出たところ、王よりボッダガヤの祠堂を修復するようにとの命があったので、レッヤーミンナンは直ちにパンタグー大僧正の指示の下に営繕資金と共に使者を送って聖地を修復した。今日でもなおボッダガヤにある石碑には*「ピュー軍の王」と、アラウン・スィートゥ王に対する称讃の言葉が古い文字にて刻かれてあるのが見られる。

* バガンは本来Pyūgāma 「ピュー族の村」の意で、ピュー族の中心地の一つであった。この種族について「唐書」には「驃国在永昌故郡南二千余里，其国境東隣真臘，西接東天竺，南尽溟海，北通南詔」と記されている。即ち、当時は驃人の国土はほとんど全ビルマに及んでいたことが察せられる。従って、バガン国王を「ピュー軍の王」と呼んでいたのであろう。

**洗髪式の儀式 (Hpot-sha- Thing- kyan-daw) は年に一度、国王の頭髪を洗う儀式であって、海へひ

座（南天の星座）（Hpót- sha- nekkhat）が子午線上にきた時に行われる。これはティンジャンの祭（ビルマの正月で、水かけ祭）の伝説に由来しているように思われる。（学報14号13頁参照）

アラウン・スィートゥ王の功績

アラウン・スィートゥ王はビルマ歴代の王の中で偉徳優れた有名な王の一人であって、彼の記憶すべき功績は、

- (1) ビルマ国内のダム，河川，池，運河等を修復整備して国土を富豊にした。
- (2) 新しい町や村を建設して，国民の繁栄と幸福を計った。
- (3) 度量衡をビルマ全国に統一させた。

重量は

pè=hkyin-ywē: (Abrus precatorius) の

種子 6 ケ乃至 8 ケ分の重さ。

mū: =pè の 2 倍，または kyat の $\frac{1}{8}$

mat=pè の 4 倍

kyat=mat の 4 倍，beitthā=a viss, 100 kyat

容量は

sale=kwun: zā: の $\frac{1}{2}$

kwun: zā: =hkwe: (茶わん) と同じ。

pyi=sale の 4 倍，kwun: yā: の 2 倍。

saywut=pyi の 2 倍

seit=saywut の 2 倍，tin: の $\frac{1}{4}$

hkwè=seit の 2 倍，tin: の $\frac{1}{2}$

tin: =hkwè の 2 倍，pyi の 16 倍

尺度は

a-taung=a cubit (ひじから中指の先端までの長さ，約17～21インチ)

a-tā=7 cubits

a-htwā=a span, $\frac{1}{2}$ cubit.

- (4) ビルマ全国を水陸両路より広く旅した。旅の途中，王が御座船（hpaung-daw）にて立ち寄った所々には“Hpaung-daw-ū:-Zedi”（パゴダ）が今日もなお見られる。ビルマから更に海を経て外国へ旅をするためにりっぱな御座船を造らせて，バセイン湖から出航し，ネグリ

岬を廻って、ビルマの西海岸一帯、ベンガル、インド東海岸、セイロン、マレー、ラムリー島 (Mān-aung-kywun:)、大南島 (*Zambū dipa) 等へ達した。

- (5) 王はまた裁判官としてもその能力を示したが、その治業はアラウン・スィートゥ・ピャットン (Alaungsithū Hpyat-hton:) として従来まで用いられていた Hton:-haung (慣習法) に基いて編集された裁判記録の中に集録されている。

* Jambūdīpa はパーリー語で Jambū (Rose-apple tree, *Eugenia*) + dipa (island) の複合語、巴利語仏教文学講本字書には、閻浮利、瞻部提、南瞻部洲の漢字が当てられている) [Sans. Jambudvīpa] この大南島は Meru 山 (ビ: Myinmo Taung) の南側、広さ 10,000 ユザナあり、三角形で車輪のような形をした島で 4,000 ユザナは海洋、3,000 ユザナはヒマラヤの山林に覆われ、残りの 3,000 ユザナに人間が住んでいると云われる。

仏教伝説の中に述べられているこの島が現在インドのいつれの地名に相当するかを言うことはできないが仏教信仰に熱心なパガン国王がその土地を求めて旅したことは容易に推察できることである。

アラウン・スィートゥが旅した所々については荒唐無稽な伝説が多く語り伝えられている。これらの伝説的な物語も現在のビルマ人の生活に何らかの深い関連性が認められる。Hman nan: Mahā Yāzawin Vol. 1, p. 317—322 に次の如く記されている。

「ネグリー岬 (Tankyi taung) の端にある平岩の上に一体の大竜神像が光を放っていて、人間の肉眼では見られなかったが、王のエメラルドの指輪を目にはめて見ると、そのままの竜像を見ることができたということである。

王はまたベンガルに到着した時、曾祖父アノータター王の時代に建てられたという楽人の石像をそこに発見した。王がその石像に演奏を命じると、それはあたかも生命あるものの如く、楽器を奏したと云う。

マラーユ島 (Mallāyu kywun:) に着いた時、ナツやビルーたち (恐らく見慣れない原住民を指しているであろう) が高德な王の行幸だと云って、岸边一帯に出迎えた。一人の鬼女は王の姿を眺めるのに夢中になっていたため、子供を手から離して海中へ落した。鬼女は泣いて王に救いを乞うと、王は剣を薙いで海神 Manimehka lā Nat dami: に子供の助命を歎願したところ、女神は王の願いを立ちどころに叶えたと云う。

マンアウン島に着いた時、マンアウンの王はアラウン・スィートゥ王に敬意を表わすことを欲しないあまり、首に壺をぶらさげて溺死してしまった。アラウン・スィートゥ王はその事を知って、「朕の如き王を拝せずして死んだとは何たることぞ、今拝ませてやるぞ」と云って、身を沈ませた場所を指さして命令を下すと、マンアウン王の身体は壺を首にぶらさげたまま、手を合わ

せて、海面に浮び上ったと云う。

また、大南島へ旅した時、大森林の中に巨大な^{とそり}蝸がいて、象を喰いちらして象牙で巢を造っていた。蝸が獲物を探しに出て行っている間に、王はその象牙を見つけて持ち去った。蝸がもどって来て、巢が持ち去られていることを知り、王の後をつけたが、王はすでに海に出て船に乗っていたので追いつくことができず、頭と尾を逆立てて王の乗った船の方を見つめていた。頭と尾を逆立てたその蝸の姿が実に綺麗であったので、王は首都へもどってから、その大蝸の姿を再現してその似姿の船を造らせて、御座船とした。

また大南島において蒲桃樹 (Zambū-thabye-pin) を見た時、諸神の王 Thagyā: min: が天よりの贈物をたづさえて樹蔭に現われ、樹の葉の間を吹く風のさざめきや聖なる河々に落つる果実の水音に新しい音階を暗示されて、アラウン・スィートゥ王はこれをビルマ音楽にとり入れたと言われている。

このように海洋を行き来できたということを考えれば、当時ビルマ人の航海術もややすぐれていたことが判る。

アラウン・スィートゥ王は騎馬術、騎象術、弓術等の武芸にすぐれていた一方、功德の面においても大いに尽力した。王は1144年パガン中のパゴダの中で王座を占めると云われているタッピンニュ・パゴダ(Thabbinnyu-Hpayā: gyi:)を建立し、またその近くにシェエグー・パゴダ(Shwe Gū Hpayā:)を建てたが、これは優美な点において最もすぐれているもので王の終焉の場所となったパゴダである。

かってアラウン・スィートゥ王は「朕はビルマ全国土は言うに及ばず海外にまでも旅をし、経験、学識、偉徳、共に先王のいづれよりも偉大である。」と豪語し、心驕ったために失明したと言われている。しかし、その後、王は先王冒瀆の罪を悔い、大臣たちの言に従い、パガンを創始したタムティヤツ王をはじめ、父君ソーユン、祖父チャンジッターに至る44代の王の黄金像を造り、造花を飾ってその前に跪いて拝すと、王の視力は回復した。このような祖先崇拜の痕跡はビルマ王家の式典の中にしばしば見出されるものである。

この式典は Kadaw pwè daw と呼ばれ、アラウンパヤー王朝 (1752—1885年) 時代には、マンドレーにて年に3度催されるのが慣例となった。

アラウン・スィートゥ王の長男ミンシンゾー (Min: Shin Zaw) は短気な性質の持主であった。ある日、宮廷に出仕すると、かねてより王を慰めるために宮廷に来ていたインド王パティッカヤーの王女が父アラウン・スィートゥと共に寝台の上に坐っているのを見て、腹を立て、その日は病気であると云って出仕を取り止めて宮廷を去った。

またある時、王は彼の側女の子であるアナンタトゥーリヤに王家着用の衣をあたえた。その王室用の衣服を着用してアナンタトゥーリヤが王の式典に列するのをミンシンゾーが見て、その階級に適さない衣服を着ているという理由で彼にそれをぬがせた。

王はその事を知り、このように勝手な振舞をするミンシンゾーを許すわけにはゆかぬと言って、彼を宮廷より追放し、マンドレーの東にあるトンドンプーテッ (Hton-don:-pū-tet) という所に住まわせた。そこに彼は今でも有名であるアウンビンレー湖 (Aung-bin-le-kan) とタモッソー湖 (Tamot-hsō:-kan) を構築して灌漑用の水道を通した。

アラウン・スィートゥ王の最後

長男であるミンシンゾーが宮廷を去ったので、次男のナラトゥ (Narathū) が国政にたづさわった。アラウン・スィートゥ王は老境に入って、健康がすぐれず、腹の黒いナラトゥは王位を我物にせんとして機会をねらった。遂に一策を立てて、父君アラウン・スィートゥをシュエグー・パゴダに監禁し、機を見て王の顔を衣の布で覆い、圧殺してしまった。時にアラウン・スィートゥは 101 才であった。(Harvey では 81 才になっている。)

その後のパガン王家には陰謀が相ついで行われ、アノーヤター王が強固に築いたパガン王朝も二百年足らずして暗黒時代に入らんとす。やがて中国系シャン族の侵入と共にパガン王国崩壊の徴候が現われんとするが、それらの事件は後日にゆづることにする。

参 考 文 献

- U Hpō: kyā: : Myanma Yāzawin Akyin: (1937)
U On Maung : Myanma Yāzawin Thit (1953)
U Min Han : Myanma Naingngandaw hket laik Yāzawin (1937)
U Thein: Han : Pyi htanng-su Thamaing: Pon pyin myā: (1956)
Bhagyi: daw Min:-tayā : 王の命により多数の学者が集成した書物 : Hman nan: Mahā Yāza win
Vol. 1
G. E. Harvey : Outline of Burmese History (1947)
著 者 不 明 : A Guide to the History of Burma.
ビルマ雑誌 : Myawadi Vol. 184 (1956)
U Hpō: Lat : Thutethana- that-yot-pya Abhidhān (1955)
Mya Zedi Kyauksā- Lē: Bhātha
高楠順次郎著 巴利語、仏教文学講本字書
佐原 六郎著 世界の古塔 (1963)
ハーヴィ著 } ビルマ史 (1943)
五十嵐智昭訳 }
U On: Shwe : That- Pon- Abhidān (1956)
William S. Cornyn } : Burmese Glossary (1958)
John K. Musgrave }
飯本 信之 } 編輯 : 南洋地理大系マレー・ビルマ (1942)
佐藤 弘 }